# 日本語の系統および日本周辺諸語について

【アルタイ語族】

ユーラシア大陸北部を中心に分布する言語で、ウラル語族と関係が深いとみられ、「ウラル語族」とまとめて呼ばれることも多い。トルコ語等のテュルク語派、モンゴル語派、満州語や女真語などのツングース語派の3語派に分類される。

クラプロートやアストンらは、早くからこれらの言語と日本語の関連を指摘。

日本語とアルタイ語の共通点として、語頭（文節の頭）に重子音や流音が立たないこと、母音調和現象、膠着語的性格を示すこと、語順がよく一致すること等が挙げられる。

しかし、アルタイ語族以外の言語でもこれらが当てはまる例があり、絶対的な証拠ではない。また語彙の対応が存在するかは疑わしい。

【韓国・朝鮮語】

・文法組織が非常に似ている。

　統語的特徴：SOV 型、形態的特徴：膠着語

・語彙の一部、特に数・氏姓などに関する制度的な語に対応が見られる。

・語頭に流音が立たない。

考古学的資料から考えても文化的接触があったことは疑いない。

しかし、SOV 型は最多数派、膠着語も多数存在している。また、基本的に閉音節言語で、有声無声の対立を持たないなど、音韻は非常に違う。語彙は中国語由来の語彙が多いので中国語由来ではない語彙で比べる必要がある。中国語が伝わる前にもう使われていた言葉、つまり日常生活に用いる言葉、基礎語彙で比較すると、基礎語彙にはほとんど対応するものが見つからない。

朝鮮語自体が系統のはっきりしない言語。ハングルが 15 世紀に発明されて朝鮮語がそのまま表記される前の古い資料を欠く。証明はきわめて困難。

【中国語】

中国語は典型的な孤立語であり、語順も SVO 型。文法組織も音韻組織も日本語とまったく異なる。地理的に近く、対応する語彙も非常に多いが、これは日本語が漢語を借用したためであって、同系とする根拠にはならない。

【琉球語】

古代畿内語と対応する語も多く、姉妹語であることは明らか。服部四郎らが同系の言語であると確認した。3 母音体系や子音の対応関係など、日本語と琉球語の音韻に一定の規則性がある。

【アイヌ語】

樺太(サハリン)・千島・北海道の先住民言語のひとつ。

・文法面

　統語的特徴：SOV 型、形態的特徴：抱合語

　動詞は数・人称により義務的に変化するが、時制変化がない。

・音韻面：閉音節語で、子音に有声無声・有気無気の対立がない。

・語彙面：日本語からの借用語が多いが、基礎語彙の対応は認めがたい。

系統不明。近代に至るまで文字を持たなかったため古語の資料を欠く。

【ドラヴィダ語族(タミル語等)】

南インドやスリランカで行われる言語のグループ。アーリア人侵入以前からインドにいた民族で、インダス文明の担い手との説がある。タミル語は紀元前 3 世紀に遡る文献を持つ。大野晋らが関係を主張。大野はタミル語を中心に比較。

文法構造や語順（SOV 型)、語の構成法が似ており、語頭に流音・有声破裂音・重子音等が立たないという制約が双方の古語において一致する。基礎語彙にも対応が見られるとされる。

【パプア諸語】

日本語とは単純な開音節の音韻構造がよく似ている。江実は、日本語とアルタイ語の語彙のあいだには関係を認めがたいと結論し、パプア語およびドラヴィダ語とのつながりを主張した。特にパプア語とは文法も類似しており、一部の方言とは語彙も対応するとし、同系であるとしている。

【チベット語・ビルマ語】

中国語やタイ語に極めて近く、声調をもつ。日本語とは音韻構造も文法組織も非常に異なる。古くはパーカー、近年では西田龍雄らが、単語の対応が見られるとして同系を主張したが、一般には受け入れられていない。

※習俗・民話等に関して、この地域の山岳民族と日本との興味深い類似が指摘される。

【オーストロネシア語】

マラヨ・ポリネシア語族とも。インドネシア語などのグループ。単純な音節構造は日本語とよく似る。しかし、文法組織が非常に異なる。語彙の流入があったとする説も。

【極北諸語】

エスキモー語、ギリヤーク語、グリーンランド語等をまとめて極北諸語と総称する。類型論のうえからは抱合語であるとされる。

【ハイブリッド言語説(重層説)】

ロシアのポリヴァーノフは 1924 年、「南島語と朝鮮語と北方アルタイ語が混ざった」とする説を発表。村山七郎は、南方語（オーストロネシア語）と北方アルタイ語の混合説を唱えた。大野晋は、ヤマイモ栽培をもたらした南方系民族が最基層を形作って単純な音韻構造の特徴を残し、つぎに雑穀・陸稲栽培とともにドラヴィダ系言語が伝わって語彙と文法組織の基礎をなし、最後に水稲文化を持ったアルタイ語系言語が上層の文法組織を作った、と推定した。